HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	J.E.T. ロジャーズによる歴史の経済的解釈
Author(s)	佐々木, 憲介
Citation	經濟學研究, 61(1/2), 1-20
Issue Date	2011-09-08
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/47157
Type	departmental bulletin paper
File Information	ES_61(1-2)_001.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

経済学研究 *61(1･2)*
北海道大学 2011. 9

J.E.T. ロジャーズによる歴史の経済的解釈

佐々木　憲介

はじめに

経済学史上，イギリス歴史学派と呼ばれる集団は，シュンペーターが定義するような意味での学派，すなわち「一人の師，一つの学説，人間的な結合」を有する集団(Schumpeter 1954, p.470)ではなく，研究上の共通の傾向をもつ緩やかな潮流というべきものであった。本稿で考察するロジャーズ(James Edwin Thorold Rogers, 1823-1890)は，他の誰にもまして，この学派の緩やかさを象徴する人物であったということができる。イギリス歴史学派の運動が本格化するのは1870年代後半からであるが，ロジャーズの研究活動はそれ以前から始まっていた。彼は，古典派経済学およびマンチェスター派の影響下で研究を開始しながら，しだいに歴史学派の方向へと進むことになった。しかし，その移行は不徹底であり，初期の特徴が最後まで色濃く残ることになった。ロジャーズの学問上の歩みを追跡したアシュレー（1889)，岸田(1955)，クート(1987)も，共通してこのような評価を与えている[1)]。とはいえ，ロジャーズが歴史学派の方向へ進んだというとき，どのような意味で歴史学派の特徴を帯びることになったのか，先行研究においては，それが必ずしも明確であるとはいえない。この問題は，「歴史学派の特徴」をどのように考えるかという問題と密接に関係しており，後者を明らかにすることなしに前者に答えることはできない。本稿の課題は，ロジャーズおよび歴史学派の経済学方法論に焦点を当てて，この点を明確にすることにある。われわれの見地からすれば，イギリス歴史学派の方法論的特徴は，次のような6つの観点によって捉えることができる。すなわち，「行為の多元性」「社会現象の統一性」「所与の事実の優先性」「歴史法則の可能性」「説明の個別性」「学説の相対性」がそれである(佐々木 2004)。本稿の結論を先取りするならば，ロジャーズは，とくに「所与の事実の優先性」および「説明の個別性」という点で，歴史学派の特徴を示してい

1) これらの先行研究のなかで最も参考になるのは，アシュレー（1889)である。アシュレーの論文は，ロジャーズの経済学研究の初期から晩年に至るまでの経過を辿り，一貫している点と変化した点とをていねいに論じたものである。しかしアシュレーにしても，歴史学派の特徴を明示したうえでロジャーズの経済学史上の位置を考察することはできていない。岸田(1955)は，アシュレー論文に依拠するところが大きい。クート(1987)は，イギリス歴史学派を主題とした唯一の著書であり，その第3章がロジャーズの考察に当てられている。しかし，クートの観点からロジャーズに接近するのは難しい。というのは，クートによれば，「イギリス歴史派経済学者の著作は，全体として，新重商主義(neomercantilism)として特徴づけることができる」（Koot 1987, p.4)というのであるが，ロジャーズはマンチェスター派の信念をもった人物であり，一貫して自由貿易を支持していたからである。少なくともロジャーズについては，経済政策上の立場をもってイギリス歴史学派の特徴とすることはできない。政策論と方法論が結びついていないということは，ウッドの評価にも表れている。「帝国の問題に関するロジャーズの議論は，彼の経済的・政治的見解の寄せ集めであり，自ら公言した帰納的方法論や統計的研究は，彼の分析にはほとんど浸透していない」（Wood 1983, p.63)。

たということになる。

本論に進む前に，ロジャーズの経歴を簡単に確認しておくことにしたい[2)]。ロジャーズは，1823年にイングランド南部のハンプシャー州ウエスト・メオンで生まれ，サザンプトンで教育を受けた後，キングズ・カレッジ・ロンドンに学んだ。1843年，オックスフォード大学モードリン・ホールに入学し，1846年に学士号を取得，人文学の優等試験一級であった。1849年には修士の学位を取得する。学位取得の後，オックスフォードのセント・ポール教会の副牧師となり，聖職に従事するかたわら，古典および哲学の研究を継続し，アリストテレスに関する著作を発表している。経済学に関心をもつようになったのは，コブデン（Richard Cobden, 1804-1865）の影響によるものといわれる（Ashley 1899）。というのは，ロジャーズの兄がコブデンの姉と結婚したために，両者は義兄弟となり，親密に交際するようになったからである。コブデンの死後には，コブデン・クラブにも参加し，生涯にわたって自由貿易論を支持し続けた。1859年，キングズ・カレッジのトマス・トゥック記念統計学・経済学講座の教授に就任し，1890年までこの講座を保持した。1862年には，オックスフォード大学のドラモンド経済学教授にも就任する。5年の任期が満了するとき，ロジャーズは再任を希望していたが，選任権をもっていた大学評議会はロジャーズの二期目の選任を拒絶した[3)]。その後ロジャーズは，ウスター・カレッジの講師としてオックスフォードに留まって経済学の研究を続ける一方，政治活動を活発に行うようになる。1880年，自由党から下院議員選挙に出て当選。グラッドストンのアイルランド政策に同調し，1886年の選挙では落選した。1888年，ドラモンド経済学教授に再任され，1890年に死去するまで，その職にあった。

本稿の第1節では，主としてロジャーズの初期の代表作『イングランドにおける農業と価格の歴史』（以下，『農業と価格』と略）第1巻・第2巻（1866年）を取り上げる[4)]。第1項では，この著作で彼が精力的に歴史研究を推進したこと，その点で，「所与の事実の優先性」という歴史学派の特徴を有する研究を行ったことを述べる。しかしその歴史研究は経済理論を例証するためのものであり，古典派と対立するものではなかったことも示す。第2項では，「経済学説の相対性」「行為の多元性」といった歴史学派の諸観点が，ロジャーズの議論には欠落していたことを示す。第2節では，ロジャーズの後期の代表作『歴史の経済的解釈』（1888年，以下『解釈』と略）を主たる考察対象とする。第1項では，この著作の中に「説明の個別性」という歴史学派の観点がはっきり表れていたことを示す。第2項では，その具体例として，イングランドの貧困問題が歴史的に説明されていることを論ずる。

Ⅰ 経済学史上の位置

1. 理論の例証

ロジャーズが歴史学派の経済学者であるとされるのは，何よりもまず，彼が経済史を精力的に研究した人物だからである。同じくイギリス歴史学派の一員に数えられるアシュレーは，パルグレーヴ編『経済学辞典』の一項目「ロジャーズ，ジェイムズ・エドウィン・ソロルド（1823-1890）」の中で，ロジャーズの功績について次のように述べている。

2）Ashley（1889; 1899），Hewins（1897），岸田（1955），Koot（1987, ch.3），Maloney（1993）。

3）この出来事については，de Marchi（1976）の研究がある。ドゥ・マーキによれば，当時の大学評議会内の保守派がロジャーズの再任を拒否する工作をしたのは，ロジャーズの経済学上の業績を評価しなかったからではなく，政治・宗教・大学運営の既成秩序を批判する急進的な姿勢を嫌ったからだという。

4）『農業と価格』の第3巻・第4巻は1882年，第5巻・第6巻は1887年に出版される。また，遺稿に基づいて，彼の息子（Arthur G.L. Rogers）が1902年に第7巻を出版している。

ソロルド・ロジャーズの名声は，『農業と価格の歴史』に基づいている。それは，将来にわたって経済史の史料に関するきわめて貴重な貯蔵庫であり続けるだろう。たとえ，ロジャーズがそれらから導くことができたと信じていた結論に対して，後続する著者たちがいかに多くの異議を唱えたとしても，別の種類の証拠によっていかに大幅に補完される必要があるとしても，そうであろう。（Ashley 1899）

また現代の研究者クートは，その『イギリス歴史派経済学，1870-1926 年――経済史と新重商主義の興隆――』のなかで，歴史派経済学に対するロジャーズの貢献について，次のように指摘している。

多くの欠陥があるにもかかわらず，イギリス歴史派経済学に対する彼の偉大な貢献となったのは，その記念碑的な『価格の歴史』であった。統計協会による半世紀間の研究に基づいてそれを拡大させながら，ロジャーズは経済史に量的な次元を提供した。（Koot 1987, pp.74-75）

確かにロジャーズは，最終的に全 7 巻となる浩瀚な著作のなかで，13 世紀から 18 世紀に至るまでの労働・穀物・家畜・羊毛などの価格について，おびただしい量のデータを印刷公表した。その研究スタイルは，まさに与えられた事実の大海の中に飛び込むという歴史学派の接近法を採用するものであり，理想化された状況を想定して推論する古典派・新古典派の方法とは違っていた。ロジャーズの経済史研究は，他の歴史学派の研究と比べて，数量的なデータを重視する点に特徴があった。とくに，貨幣賃金と食料価格を調査して実質賃金を求め，労働者の生活水準を歴史的に比較することに精力を傾けた。このような研究方向は，後述するように，他の歴史学派の論者から社会の制度的枠組みを軽視するものであるという批判を受けることにもなった。しかし，経済史研究の方向に相違があったとはいえ，われわれが先に言及した歴史学派の諸観点との関係で言えば，「所与の事実の優先性」という点で，ロジャーズは歴史学派の特徴を示していたということができるのである。そのために，経済学者としてのロジャーズの名声は，「1870-1880 年代に支配的な学説を批判し始めた反抗心のある経済学者にとって，頼りになる砦だった」（Ashley 1889, p.389）のである。

しかし，歴史的資料の収集という点では歴史学派の特徴を示していたけれども，その資料の使い方という点では，ロジャーズは必ずしも歴史学派とは言えなかった。この問題について，アシュレーは端的に次のように述べている。

経済学者としては，ロジャーズ氏はそのころ，後で見るようにほとんど全く『正統派』であった。穀物法廃止の年に学位を取り，コブデンとの親密な交友関係をもち，ミルの影響が頂点に達していたときに経済史研究を始めた者にとって，それは自然なことであった。したがって，彼が抱いていた歴史観は，当時は普通のものであり，そして今でもなお経済学者の間で稀ではないのであるが，歴史を経済理論の控えめな侍女とみなし，歴史の助けを借りることなしに到達された『法則』の例証および確証（illustration and confirmation）を提供するものとみなす歴史観であった。（Ashley 1889, pp.382-383）

確かにロジャーズは，理論を事実によって例証することが帰納法の役割であると考えていた。『農業と価格』第 1 巻の序文で，彼は次のように述べている。

すべての経済学者が公言するところによれば，事実による例証（illustration of facts）は，彼らの科学の方法において，原理に関する議論あるいはその解明と全く同じくらい重要である。私の見解では，これらの事実は経済学上の帰納（economical induction）のための基礎とな

るものであるから，よりいっそう重要である。ところが，精密な推理を豊富な例証と組み合わせている著作家はほとんどいない。経験に従うと公言することがいかに多いとしても，忍耐強い観察という骨折り仕事に耐えた著作家はほとんどいない。アダム・スミスとトゥックは傑出した例外である。（Rogers 1866, I, ix）

ここでロジャーズ自身が認めているように，「事実による例証は……原理に関する議論あるいはその解明と全く同じくらい重要である」ということは，すべての経済学者が公言していたことであった。その意味でロジャーズの方法論上の立場は，なんら異端派の見地を示すものではなかった。なるほどリカードウは，自分自身では経済理論を例証するために事実に訴えることは少なかったけれども，それが不要だと主張していたわけではない。マルサスが人口の原理を確証するために，自ら事実を収集するという作業を精力的に行ったことは周知の通りである。また J.S. ミルは，経済学の適切な方法として帰納-論証-検証という三段階からなる演繹法を提唱していたのであるから，検証の過程を重視していたことは言うまでもない[5]。必要性を認められてはいたが実際には十分に行われていなかったことをロジャーズが実行したというのであれば，ロジャーズの歴史研究は，古典派を補完する性格のものであって，それを批判する性格のものではなかったといわなければならない。

したがって，この段階のロジャーズの議論は，歴史学派の独自の立場を表すものではなかったということに注意しなければならない。古典派の方法論に対する歴史学派の批判は，理論を事実によって検証するという点に向けられたものではなかった。また，演繹的推論そのものを否定したわけでもなかった。そうではなく，彼らはまず理論の前提の非現実性を攻撃したのである。J.S. ミルの帰納-論証-検証という三段階に即していうならば，歴史学派は第一段階の帰納の部分を批判したのであって，それに続く二つの段階を批判したのではなかった。レズリーが述べるように，「経済科学では演繹が不要だといっているのではない。一般的原理からの推論や，一般的原理の適用はすべて演繹である。いわんとすることは，経済学は演繹的科学の段階に到達していないということだ」（Leslie 1879, p.949）というのである。彼によれば，リカードウに代表される演繹法は，単なる仮定からの演繹であり，現実的な前提から出発するものではない。したがって，現実的な前提を獲得するためには，演繹に先だって，詳細な事実調査と，それに基づく一般化が必要なのである。先に触れたように，J.S. ミルもまた論証に先立って帰納的研究が必要であると主張していたが，ミルとレズリーとでは，帰納的研究の意味が異なっていた。ミルの場合には，要素的な因果法則の解明，すなわち個々の動機から生ずる行為の様式を研究することが第一段階の帰納の課題であったが，レズリーの場合には，所与の動機複合体から実際にどのような行為が生ずるのかを研究することが帰納の課題とされた。ミルの判断では，経済学はすでに第一段階を終えており，第二段階の論証もかなり完成度の高いものになっていた。これに対してレズリーは，経済学はいまだ演繹を行う段階に到達しておらず，当面は事実研究に全力をあげるべきだと主張したのである。このようにして，当面する課題をめぐって，演繹法と帰納法とは対立するものになった。これが，演繹法対帰納法という対立図式の一つの側面であった[6]。

5）古典派の方法論については，佐々木(2001)を参照されたい。

6）もう一つの側面は，優先すべき課題をめぐるものであった。すなわち，歴史学派にとって，帰納法の課題は論証の前提を現実的なものにすることだけではなかった。帰納法のもう一つの課題は，経済発展の過程を一般化することであった。歴史学派によれば，古典派の演繹法は，ある特定の歴史

レズリーや，歴史学派の先駆者とされるリチャード・ジョーンズは，十分な事実調査を行うことなしに設定された仮説を予断（anticipation）と呼び，これに対して批判を加えた[7]。ところがロジャーズは，自らの研究方法を述べるさいに，最初に予断を導入し，それを事実によって検証することこそが，自らの歴史研究の課題であるとする。彼は，中世における賃金の動向を研究するにさいして，次のような方法を示すのである。

これらの〔農場における使用人の〕[8]用役の価格を取り扱うとき，われわれは次のような予断を抱くように導かれるはずである。すなわち，農民（agriculturists）と職人（mechanics）の報酬は，一般的には人口と労働需要との間の関係で，言い換えると，雇用を求めて競争する人々の数と，そのような競争者の間に分割されうる賃金の総量とによって決定されるけれども，報酬率の変化は通常時には非常に緩やかなものであろう。もし急激な騰貴が起こるならば，労働供給のかなり大規模な減少のせいであるにちがいない。もしその騰貴が急激かつ永続的であるならば，労働者の状態に何らかの相当な改善が起こっていて，彼らはそれを失いたくないと思い，人口の秩序を研究する者には周知の手段の幾つかを用いて，彼らはそれを維持しようと決意する。こういった予断である。（Rogers 1866, I, pp.261-262）

この引用文の前半で述べられているのは，明らかに賃金基金説である。つまり，中世においても，賃金は「一般的には人口と労働需要との関係で，言い換えると，雇用を求めて競争する人々の数と，そのような競争者の間に分割されうる賃金の総量とによって決定される」という予断が最初に導入されるのである[9]。これに続けて，ロジャーズはさらに３つの予断あるいは期待（expectation）を列挙する。

さらに，われわれはまた次のような予断を抱くはずである。すなわち，騰貴が起こるとしても，それは必ずしもすべての労働に等しく影響するのではなく，労働需要が規則的であるような種類の労働については，その影響が明白に識別できるようになるのは時間を置いてであり，労働需要が緊急かつ一時的であるようなものについては，直ちにであろう。（Rogers 1866, I, p.262）

われわれはまた，労働の価格は製造業が存在する地域で高いということを，期待するであろう。（Rogers 1866, I, p.262）

また一方で，われわれは次のような予断を抱

的状況を前提として，しかも単純化された状況を想定して演繹を行っているが，経済学の課題は，そのような狭い範囲を考察するのではなく，むしろ歴史的な発展過程を考察することにある。このようにして，優先すべき課題をめぐって，演繹法と帰納法とは対立するものになった。これが，演繹法対帰納法という対立図式の第二の側面であった。

7）「予断（anticipation，ラテン語 anticipatio）」は，フランシス・ベーコンによって科学方法論に導入された概念である。ベーコンは，これについて次のように述べている。「私は，自然に対して用いる人間の推論を『自然の予断』（軽率で早まったものであるから）と，正しい仕方で自然から引き出される推論を『自然の解明』と，説明の便宜から呼ぶことにしている」（Bacon 1620, p.51, 訳 235 頁）。

8）〔　〕は引用者による補足である。

9）ロジャーズはのちに，労働組合運動の意義を認め，賃金基金説を批判するようになる。すなわち，1884 年刊行の『6 世紀間の労働および賃金』では，次のように述べている。「私は以下のことを告白する。イングランドにおける労働の歴史，すなわちその驚くべき変転を研究する以前の初期の著作で私が考えていたのは，多少の疑問はあったけれども，労働組合組織は雇い主を貫いて消費者と対立し，（ミル氏の賃金基金説に賛成したことは一度もないけれども）労働が支払いを受ける弾力的ではあるが共通の基金から不当な分け前を着服し，大多数の勤労大衆の利益を排除する労働貴族制を樹立しようとしている，ということであった。労働の歴史に関する研究によって，これらの考えは一掃された」（Rogers 1884, pp.564-565）。

くであろう。労働の価格と食料の価格は同じ諸原因に依存するものではなく，したがって両者の変動率は規則的かつ相互に一致するわけではないが，それにもかかわらず幾分は，そして大きな規模では相関していること，食料とくに高級な食料が高価なところでは，労働もまた高価であり，食料生産費の増大が引き起こす以上に高価であること，これらの予断である。（Rogers 1866, I, p.262）

最後の予断の中に示されている「労働の価格と食料の価格は……大きな規模では相関している」という命題は，賃金基金説と並んで，古典派の賃金理論を示唆しているように見える。この部分についてアシュレーは，「その後に拒絶することになるリカードウ学説」を採用していると解釈する（Ashley 1889, p.383）。すなわちアシュレーはこの命題を，長期的には賃金が労働者の生存費に一致する傾向があるという「賃金生存費説」を意味するものと解釈するのである。しかし，アシュレーも示唆しているように，ロジャーズは『農業と価格』第1・2巻の2年後に出版した『経済学入門』において，リカードウ地代論を激しく批判している[10)]。その意味で，経済理論に関するロジャーズの見解は，古典派と同じ場合もあれば，違う場合もあったということになる。さらに，コブデンらのマンチェスター派が，穀物価格と賃金との連動を否定していたことを考えると（熊谷 1991, 44-46頁），ロジャーズの経済理論上の見解は，マンチェスター派と全く同じであったわけでもないことが分かる。アシュレーが指摘するように，「理論家としては，ロジャーズ氏が経済科学に付け加えたものはほとんどない。実際に彼は，最近の論争の精密な性質や，その議論が到達した地点を，理解していなかったように思われる。しかしその時には，理論を構築する時代がすでに過ぎ去っていた可能性がある。ロジャーズ氏が判定されるべきなのは，経済史家としてなのである」（Ashley 1889, p.407）。われわれもまた，ロジャーズの経済理論上の見解を吟味するよりも，理論と歴史の関係について彼がどのように考えていたのかということに注目したい。歴史学派の一員としてのロジャーズを評価するためには，後者の問題のほうがはるかに重要なのである。

理論と歴史の関係について見るならば，ロジャーズは，どのようなものであれ経済理論を事実によって例証することをもって自らの課題とする姿勢を示しており，その意味で古典派と同じ立場に立っていたということができるのである。そうしたロジャーズの姿勢は，次の言葉のなかに端的に表れている。

われわれは，労働への支払明細書を吟味するとき，とくに平均をとり，それから10年ごとの推論結果を集め，そして最後に，1350年前後の二つのはっきりした時期を比較することによって，《ペスト大流行》の効果について解釈するとき，これらすべての予断が検証されるのを見出すであろう。（Rogers 1866, I, p.263）

私が試みるのは，これらの仮説を例証し，それらがどのように検証されるかを示すことである。（Rogers 1866, I, p.263）

このように，ロジャーズによる経済史研究の目的は，最初に導入した予断を事実によって検証することにあった。その意味でロジャーズの研究は，一面では「所与の事実の優先性」という歴史学派の観点を示すものではあったが，古典派と対立する方法を提示するものではなかったのである。

10）リカードウ地代論とともに，マルサス人口論も批判されている。どちらも，経験によって反駁されているという観点からの批判である。「ロジャーズ氏の意見では，イギリス経済学者の欠陥を最も明白に例証する二つの主題のうちの一つが人口であった――もう一つは地代――」（Ashley 1889, p.385）。

2. 学説の相対性

『農業と価格』の第1巻・第2巻で取上げられたのは，1259年から1400年のデータである。注意しなければならないのは，これが中世のデータだということである。このことは，中世のデータもまた，19世紀の経済学説を検証するのに有効なものであるとロジャーズが考えていたことを意味する。「経済学説の相対性」の観点，すなわち特定の経済学説は特定の時代状況を反映しており，他の時代状況には適用できないという観点は，歴史学派のほとんどの論者に共有されていたものであった。しかしロジャーズは，この点でも多くの歴史学派の論者と立場を異にしていたのである[11)]。

ではロジャーズは，なぜ中世のデータによって近代の経済理論を検証することが可能であると考えたのか。この問題を検討すると，歴史学派の大勢とロジャーズとの相違がよりいっそう明らかになる。すなわち，ロジャーズの場合には，「行為の多元性」および「社会現象の統一性」という歴史学派の観点も乏しかったことがわかるのである。

> 歴史の行程において，少なくとも経済学者が受入れている衝動と感情に関して，人類が同じままであるとすれば，妨害されない交換という単純な事例に限定される事実の解釈は，きわめて信頼できるものであるだろう。概して中世の政府は，後世の政府活動を特徴づける保護システム，すなわち交易の自由への絶え間のない干渉を進展させはしなかった。私が言っているのは，国内および港湾の両方で，制限しようとする欲求がなかった，つまり価格を公定にしようとはしなかった，ということではない。そうではなく，そうした制約を効力のあるものにしうる仕組みがなかったのである。したがって，あえて言うのだが，経済学の問題のなかには，現代のより広範な情報よりも，私が読者に示すことができる，しばしば断片的である事実に基づいて，いっそう容易に識別し確定しうるものがあるのだ。かくして，例えば価格を支配する法則は，現代の《価格表》よりも，これらの中世の記録の中に，よりいっそう明白に表れる，と私には思われるのである。（Rogers 1866, I, ix-x）

引用文の最初の一文にある「経済学者が受け入れている衝動と感情に関して，人類が同じままであるとすれば」という文言が意味するのは，経済的行為者の動機が現在も過去も同じであるとすれば，ということにほかならない。仮定の書き方になってはいるが，ロジャーズがそのような動機の不変性を肯定していることは明らかである。イギリス古典派の経済理論は，富を獲得しようとする動機に基づいて行為する人間を前提として，その理論を構築した。これに対して歴史学派は，時代や地域が違えば，そのような富の動機が変化することを強調した。すなわち，過去の時代においては，政治的・宗教的な動機，あるいは慣習の作用によって，19世紀中ごろのイギリスとは異なるタイプの経済的行為が支配的であったことを強調した。しかしロジャーズの場合には，そのような「行為の多元性」の視点は，歴史研究を導くものとはならなかったのである。

引用文の第二文以下で述べられているのは，中世の市場は政府からの干渉を受けなかったということである。政府が価格を規制するならば，その価格は市場の自由な作用によって決まる価格とは違うものとなる。したがって，中世において価格規制が行われているのであれば，その時代のデータは経済理論を検証するのには不適切なものとなる。しかしロジャーズは，中

11)「ジェームズ・エドウィン・ロジャーズの経歴は，他の多くの者の経歴にもまして，歴史派経済学は，一人の指導者，一団の追随者，および共通の研究計画をもつ緊密な学派を構成しているわけではない，ということをよく示している。歴史派経済学者を自称するにもかかわらず，彼は特定の時代と場所における経済理論の相対性を強調してはいなかった」（Koot 1987, pp.64-65）。

世の政府には価格を規制する力がなかったとして，中世のデータを経済理論の検証に使用することを正当化しているのである。ロジャーズにとっては，価格の動向こそが経済史研究の主要なテーマであり，その価格の動向は政治から独立しているものであった。その結果，ロジャーズの議論においては，「社会現象の統一性」という観点は重要な意味をもたなくなった。価格の動向は，他の社会現象から切り離して，それ自体として研究することができるものとみなされたのである。ロジャーズのこうした考え方は，アシュレーやカニンガムの批判を招くことになった。アシュレーによれば，経済理論家が市場の作用に夢中になっているために，またロジャーズがこの種の史料の収集に全注意を集中したために，経済史家が最も切望しているのは過去数世紀における一日の労働と一日の食料の価格を知ることだ，という考えが増大してきた。しかし，この種の事実が貴重なのは，それらを適切な場所に置くことができる場合のみである。経済史家が第一に求めるのは，それぞれの時代に社会の制度的枠組みになっていたもの，さまざまな社会階級を構成してきたもの，および社会階級間の相互関係なのだというのである。そして，中世史家シーボーム（Frederic Seebohm, 1833-1912）の研究と対比して，次のように述べる。

> イギリス農業史に重大な関心をもっている者すべてが抱かないわけにはいかない印象――シーボーム氏の著作[12]の冒頭100ページの方が，ソロルド・ロジャーズの浩瀚な収集物よりもはるかに大きな重要性をもつという印象を説明するのは，これなのである。しかも，前者はたぶん，後者が費やした時間と労働の4分の1を，この主題に費やしただけなのである。そのような印象がもたれるのは，シーボーム氏がわれわれに，農業人口の日々の生活について生き生きとした描写を与えるからであって，それによって初めて，ロジャーズ氏の事実にも真の意義が分け与えられるのである。（Ashley 1893, p.16）

カニンガムもまた，次のように述べている。

> ソロルド・ロジャーズ教授は多くの点でその態度を修正したけれども，彼の著作の主要な方向を決定したのは古典派経済学（classical political economy）であった。彼は実際に，特定の研究の方向――価格の記録に示されている諸個人の取引――に，自分自身の仕事を限定した。彼は，異なった時代における産業生活の一般的条件との関係で，利用可能な証拠を検討するということはなかった。……この故に，ロジャーズ教授によって行われた経済史研究は，あれほどの功績がありながら，イングランドで流布している経済学の領域と課題についての考え方を修正するということについては，ほとんど効果がなかった。（Cunningham 1894, p.320）

このようにロジャーズは，交換行為に関わる人間の動機は19世紀も中世も同じであるとみなし，歴史学派の特徴である「行為の多元性」の観点をもたない経済史研究を推進した。さらに，中世の政府には価格を規制する力がなかったとして，市場や価格という経済現象を他の社会現象とは独立に研究できるものとし，歴史学派に特有な「社会現象の統一性」の観点も取り入れることがなかった。そうした認識の下で，「経済学説の相対性」も無視され，19世紀の経済学説は中世の時代状況にも適用できるものとされたのである。これらの点を考慮するならば，アシュレーやカニンガムがロジャーズの経済史研究

12）アシュレーは，パルグレーヴ編『経済学辞典』の一項目「歴史学派経済学（Historical School of Economists）」のなかで，イングランドにおける経済史の詳細な研究と体系的な教育に刺激を与えた著作として，シーボームの *English Village Communities*（1883）と *Tribal System*（1895）を挙げている。上記の引用文で言及されているのは，出版年から考えて前者であると思われる。

を批判したのも当然のことであった。たしかにロジャーズは，歴史学派の一員であると考えられてはいるが，この時期の経済学方法論は，多くの点で歴史学派のアプローチに反するものだったのである。

さらに，「経済学説の相対性」の観点については，もう一つ重要な問題があった。この場合の「学説」には，経済分析だけではなく，経済政策の提言も含まれるのであるが，ロジャーズは，時代状況によって適切な経済政策が変わるという意味での「学説の相対性」も採用しなかった。彼は，国内の経済活動についても，外国貿易についても，自由主義こそが普遍的に適切な政策であるという立場を採り，生涯を通じてこの立場を変えることがなかった。後述するように，ロジャーズ晩年の著作『解釈』は，いくつかの点で歴史学派の観点を示すようになった重要な著作であるが，そこにおいてさえ自由主義の立場は堅持されているのである。ロジャーズは，『解釈』の巻頭で次のように述べている。

> 真理であると同時にその応用において普遍的である経済的通則（economical generalities）が存在することを否定しない点で，私は人後に落ちないだろう。それは，例えば次のようなものである。個人は，自分の貨幣と自分の労働の生産物とを最も有利な用途に使うことができるという，譲り渡すことのできない権利をもっている。そして，この権利に対する介入はどれも権力の濫用にほかならない。これについては，何にせよ妥当な弁明はなされなかったし，またなされえないのである。言い換えると，自由交換の要求に対する反論は存在しないのである。（Rogers 1888, v）

保護貿易を非難する論調は激しいものであり，まさに「保護主義のなかに嫌悪をもよおす荒廃以外のものを見出すことを，コブデンの弟子に期待するのは難しい」（Ashley 1889, p.394）という印象を与えるものであった。ロジャーズにとって，保護主義とは一部の事業家が大衆を犠牲にして利益を得ることであり，自由貿易とは大衆が利益を得ることにほかならなかった。たしかにロジャーズ自身も，19 世紀半ばのイギリスで採用されたような自由放任政策が，すべての社会的災厄を解決する万能薬ではなかったということは認めていた。しかし，彼にとって社会を苦しめる害悪の多くは，自由放任政策のせいではなく，過去の政府が行った政策に帰せられるものであった。

> 社会を苦しめる害悪の多くは，結果が後まで残るような原因，つまり原因がずっと前に作用しなくなり，忘れられたときでさえ，その結果が大いに有害であるような原因に帰せられるのである。……賃金を規制する法律，治安判事の査定，そして教区定住，旧救貧法，新救貧法，穀物法が労働に痕跡を残しているのであって，自由放任の学説および慣行は，今日の石鹸と同じくらい大量に宣伝されたとしても，それを洗い流すものではない。（Rogers 1888, p.350）

そして，「自由放任はその最盛期においてさえ，今まさに耳にする立法・行政府と同じく，観念的にのみ存在する理想なのである」（Rogers 1888, p.351）とし，真の自由放任政策は現実の世界においては実行されておらず，したがって，過去の問題をすべて解決するほどの効果を発揮するには至っていないと主張するのである。

さらに，19 世紀末になって，自由競争についての懐疑的な考え方が台頭してきたことをロジャーズも認めていた。「もはや競争の恵み豊かな作用は終わりを告げたように見える。そこで，もし生産者たちが生存を続けてゆこうとするならば，国民的産業が公正な利潤を獲得しうるような何か他の手段が採用されなければならない，というように見える」（Rogers 1892,

p.377)[13]。すなわち，1870年代半ばからの不況のなかで供給が需要を超過し，価格が生産者に報酬をもたらさないところまで下がっているため，事業家が協調して生産調整を行い，公正な利潤を獲得しうるように価格を引き上げる必要がある，という意見が提出されるようになってきたというのである。これに対してロジャーズは，事業家のそうした連合は長続きせず，結局は失敗すると主張する。

> 生産者に対して価格を保証しようとする反競争的な試みが，絶えず繰り返され，絶えず失敗してきた。従来から知られていて，実際に用いられてきた最も利益が得られる過程は，強者あるいは強者の結合体が，低価格あるいは報酬が得られない価格で弱者を破滅させ，独占を形成して公衆からの略奪を始めることである。しかし，その方策は諸個人を富ませるかもしれないが，一時的なものである。遅かれ早かれ競争が再び行われるようになり，特別利潤は阻止される。(Rogers 1892, p.378)

ロジャーズによれば，自由放任の目的は，個人主義と呼ばれるものを支持することであって，結合体を支持することではない。ましてや，消費者に対する陰謀であると考えられる理由が多少ともあるものを支持することではない(Rogers 1892, p.381)。「過度で破滅的な競争に対する自然なチェックは，より弱い戦闘員が闘争の中で倒れ，概して最適者が生存するという結果がもたらされ，その産業が究極的にそれ自身を正す見込みがある，ということである」(Rogers 1892, p.382)。これがロジャーズの考えであった。ロジャーズの自由主義は，歴史的に相対的なものではなく，普遍的に通用する原理だったのである。

Ⅱ　歴史の経済的解釈

1. 歴史的説明

前節で見たように，1860年代にロジャーズが行った経済史研究においては，歴史的事実は理論を例証するものとして位置づけられていた。こうした考え方はその後も維持されたが，1870年代後半になると，これとは違う考え方も示されるようになる。われわれは，後期の代表作である『解釈』の考察に進む前に，1870年代後半のロジャーズの見解を取上げ，その変化を見ておくことにする。

まず注目しなければならないのは，1876年5月31日に経済学クラブの主宰で行われた『国富論』出版100年記念晩餐会・討論会におけるロジャーズの発言である。この討論会では，スミスが用いていた方法は演繹法なのか帰納法なのかということが問題にされた。グラッドストン内閣で閣僚を務めたロー（Robert Lowe, 1811-1892)は，この討論会の冒頭で，スミスが用いていた方法は演繹法であったと主張した。ローによれば，スミスは，

> 人間の心の中に入っていく独特の才能をもっていた。そして，自分が論ずる主題を取り扱うさいに，彼は，人間が一定の事情の下で何を為すであろうかを予断し予見する能力(faculty of anticipating and foreseeing)をもっていた。これによって彼は，《経済学》[14]を演繹的科学(deductive science)の位階にまで引き上げる力を得た。人間を扱う科学と称されるもの，すなわち人間の思考・願望・行為を扱う科学と称されるものすべてのなかで，これだけがそのよう

13)『イングランドにおける産業および商業の歴史』(1892年刊)は，ロジャーズが1888年から1889年にかけてオックスフォード大学で行った連続講義の原稿をもとに，息子のアーサー・G・L・ロジャーズが出版したものである。それは，まだ未完成な原稿であり，本来であれば修正の後で刊行されるはずのものであった(Hewins 1892)。

14) 引用文中の《　》は，原文が大文字で強調されていることを表す。

な位階にまで上ったふりができるものであると思われる。(Political Economy Club 1876, p.7)

ここでローは，「人間が一定の事情の下で何を為すであろうか」を推論すること，すなわち一定の事情と人間の心の働きとを前提として，そこから生じる帰結を推論することをもって演繹法と考えている。これを敷衍するならば，例えば，ある商品の市場価格が自然価格を上回っているという事情の下で，その商品の生産者は何を為すであろうか，と推論することを意味する。このような事情の下では，生産者は期待する以上の利益を得ることができるから，生産を拡大してより多くの商品を市場に供給する，という推論が行われることになる。ローは，スミスが『国富論』のなかで，この種の推論を行っていたと主張したのである。

これに対してロジャーズは，次のように述べる。

彼〔ロー〕がアダム・スミスを著しく演繹的な精神をもつ著作家として語るのを聞いて，驚いたと言わざるをえない。私が理解している論理学用語をすっかり忘れてしまうのでない限り，アダム・スミスは経済学に関するすべての著作家の中で，仮説的な理論から出発すること，したがって自分自身の意識の深みから経済学を展開すること，こうしたことから最も遠い人物であった，というのが私の結論である。逆に彼はつねに事実に訴えている。すなわち，自分が到達した結論のための帰納を実行したのである。(Political Economy Club 1876, p.32)

ロジャーズの議論は，必ずしも明晰ではないが，仮説的な理論から経済学を展開する方法を批判していることははっきりしている。ここで仮説的な理論とは，自分自身の意識に基づいて他の人々の心の働きを類推し，人間の意識について何らかの一般的な想定を行う，ということを意味すると考えられる。これに対置されているのが，事実に訴えることである。しかし，仮説的な理論を展開することと，その結論を事実によって例証することは，矛盾するものではない。古典派の方法論においては，両者はむしろ補完的な関係にあるものと考えられている。先に述べたように，ロジャーズ自身も，人々の「衝動と感情」を一般化することを躊躇せず，交換行為に関わる人間の動機は19世紀も中世も同じであるとして，19世紀の経済理論を例証するデータを中世にも求めていた(Rogers 1866, I, ix-x)。ここでは人間の心の中に入ってゆく方法を否定するのであるが，否定する根拠は明らかではない。いずれにせよロジャーズが積極的に主張するのは，スミスの方法の特徴は，結論を事実によって例証する点にある，ということである。すなわち，何らかの手段によって到達した結論を例証するために事実を集める，という意味での帰納を実行したことにある。この意味での帰納法を称揚することは以前と同じであるから，新たに付け加えられた主張は，仮説的な理論から出発する方法に対する批判ということになる。仮説的な理論に対する批判は，地代について語っている箇所にも見られる。

スミスは，地代を歴史的な観点から取り扱ったが，この観点からは彼の推論は鉄壁のものである。明らかなのは，地代の歴史を学んだ者，すなわち，その題目を帰納的に扱った者にとっては，アダム・スミスに反対して取り上げられた見地のほとんどすべてが誤りだということである。この種の誤りの中で最も顕著なものの一つは，ウエスト，アンダーソン，そしてかの有名な著作家リカードウ氏のものとされる地代論である。というのは，この理論の基盤全体が仮説だからである。(Political Economy Club 1876, p.33)

先に引用したローの見解と対比するならば，ここで問題にされているのは，「人間が一定の事情の下で何を為すであろうか」を推論すると

いうときの，「一定の事情」にほかならない。すなわち，演繹法を用いる経済学者が前提とする「一定の事情」が非現実的だというのである。ロジャーズによるリカードウ地代論批判の中心にあったのは，リカードウが農業における技術進歩を軽視しているということであったが，この種の批判はとくに珍しいものではなく，リカードウ地代論は非現実的であると批判する論者に共通する論法であった。ある原因の結果を考察するために，攪乱原因を排除した理想的な状況を想定しようとするリカードウに対して，多くの原因が作用している現実の状況を対置するならば，両者が乖離することは当然といってよい[15)]。いずれにせよロジャーズは，演繹の前提となる「一定の事情」についても，歴史的事実に忠実であるべきことを求めているのである。

しかし，この討論会における発言からロジャーズの後期の方法を探るのは難しい。リカードウたちの演繹の前提は事実に基づかない仮説である，という主張は明確に示されているが，何らかの手段によって到達した結論を例証する事実を集めるという意味での帰納法は，以前と同じだからである。晩年の代表作である『解釈』につながるような方向を示しているのは，むしろ「クリフ・レズリー『政治・道徳哲学論集』の書評」（1879年）であるといわなければならない。この書評で，ロジャーズは次のように古典派経済学者を批判するのである。

> 本書の著者がまさに語っているように，イングランドの経済学者には二つの学派がある。一方の学派は，二三の真である原理と，いくつかの怪しげな，あるいは誤った原理を仮定し，社会的な生活と行為とに関する図式を，しばしば，存在しないあるいは存在しえない前提から構築する。……賃金基金学説，リカードウの地代学説，人口理論学説，利潤均等学説，資本増加の『法則』に関する学説が，不十分であったり人為的であったりする諸前提からの推理に共通する，多数の致命的な習慣の例である。（Rogers 1879, p.490）

これに対して，新たに台頭してきた歴史学派は，古典派とは別のプログラムを掲げているという。

> とはいえ，経済学者のもう一つの学派が成長してきた。その学派は，諸事実を諸原因にまで遡及することを主張し，一つの結果に貢献したものすべてについて忍耐強く探究した後にのみ，通則（generalities）を組立てる。例えば，1エーカーの耕地の地代が一定期間後に100倍に増えたのに，そこで生産された1クォーターの穀物の価格が同じ期間に10倍にしか増えていないのはなぜか。……アダム・スミスの時代には，商業および製造業階級が自由貿易の主要かつ一貫した敵であり，地主および農業者がおそらく自由貿易の唱道者であったのに，スミスの死から20年後には，前者が自由貿易主義者になり，後者が保護主義者になったのはなぜなのか。（Rogers 1879, p.490）

ここで注目したいのは，第一に「諸事実を諸原因にまで遡及すること」が歴史学派の課題とされていることである。これは，われわれが歴史学派の特徴の一つとして挙げた「説明の個別性」の観点にほかならない。つまり，特定の経済的事実に焦点を当てて，その原因となった事実を探究することを研究の課題とする観点である。この観点からすれば，歴史的事実は，理論の例証として取り上げられるわけではない。歴史学派にとって重要なのは，一般理論というよりも，特定の時代状況のなかにある個性的な事実なのだ，という観点がここに示されているのである。第二に注目しなければならないのは，「一つの結果に貢献したものすべて」が探求されなければならないとされていることである。あ

15）リカードウの方法については，佐々木（2001，第2章）を参照されたい。

る経済的事実の原因を遡及するというとき，その原因は経済的なものに限られるわけではない。ロジャーズは，「現存するどの共同社会も，政治的あるいは経済的，さらには宗教的観点から考察するならば，非常に膨大な事実群の成果である。その事実群は，その所産についての正当な評価が得られるまで，可能な限り広範に収集され評価されなければならない」（Rogers 1879）と述べ，経済史研究といえども，政治的あるいは宗教的な事実をも考慮しなければならないと主張する。つまり，歴史学派の特徴の一つである「社会現象の統一性」の観点が，ここで示唆されているのである。

このような歴史学派の観点を自らの方針として，ロジャーズは『解釈』へと進んだのである。その実質的な内容は項を改めて検討することにし，ここでは第一の点，すなわち「説明の個別性」に関わる方法論的な問題について考察することにしたい。この第一の点こそ，ロジャーズが「自分自身を歴史派経済学者の列に加えた」標識となるものだからである[16]。まず，アシュレーの評価を見てみよう。

> ロジャーズ氏は，選択した事実を適合させる理論を構築するのではなく，『社会的事実の歴史を吟味し説明すること』，すなわち最初に事実を得て，そしてそれらを説明することを，自らの仕事にしようと決意する。彼が語るところによれば，『正しく解された経済学は，すべての社会的条件の解釈なのである』。ここまでは，われわれの多くが彼に同意するであろう。（Ashley 1889, p.392）

この引用文に続けてアシュレーが述べるのは，実質的な説明の内容に関してはロジャーズに賛成できないということであるが，それについては次項で詳しく考察する。ここで注目したいのは，「最初に事実を得て，そしてそれらを説明する」という研究方法をアシュレーが支持している点である。この研究方法は，われわれが本稿の第１節で取上げたロジャーズの方法，すなわち経済法則の例証として歴史的事実を取上げる方法とは，明らかに違うものである。ここでロジャーズが関心をもっているのは，一般法則を例証することではなく，個性的な事実を説明することなのである。もちろん，個性的な事実を説明するさいに，その手段として一般法則が利用されることはある。例えば，歴史的事実ＡとＢとの間に因果関係を認めることができるのは，「Ａが起こるときには，つねにＢが起こる」という一般的関係を知っているからである[17]。しかしその場合には，一般法則は歴史的事実を説明するための手段になっていることを忘れてはならない。違いを明らかにするために，リカードウの方法と対比してみよう。リカードウは経済学の原理を解明するために，他の事情によって妨害されない場合を想定して，ある原因が作用するときに，どのような結果が生ずるのかを考察した。つまり，リカードウの場合には，ある一つの原因に注目して，その結果を明らかにするというアプローチが採用されている。これに対して，歴史学派においては，歴史的事実という一つの結果に注目して，それを

16）ここで引用したのはクートの言葉である。クートによれば，「1866 年には，ロジャーズはなお，事実によって経済理論を例証することで満足できた。もっとも，彼は急いで，『これらの事実が経済学的帰納の基礎をなす』と付け加えていた。気質においても見解においても論争的な性質をもっていた自分自身の研究に促されて，またレズリーおよびイングラムの歴史的批判に支えられて，1870 年代には，彼はますます，帰納的経済学，社会的に適用可能な経済学を強硬に主張するようになった。1879 年には，はっきりと自分自身を歴史派経済学者の列に加えた」（Koot 1987, p.69）。しかしクートは，どのような意味でロジャーズが「自分自身を歴史派経済学者の列に加えた」のかということについては述べていない。

17）歴史的事実の間に精密な法則が成り立つことはほとんどないから，正しくは「Ａが起こるときには，多くの場合にＢが起こる」というべきであろう。

引き起こすにいたった諸原因を明らかにするというアプローチが採用されるのである。歴史的に個性的な事実は諸要素の複合体であるから，それを生み出した原因も複数あると考えられる。したがって，歴史学派のアプローチは，リカードウとは逆に，第一に，結果から原因へと遡及し，第二に，一つではなく複数の原因に行き着く，という特徴をもっているのである。歴史学派は，経済法則あるいは経済理論を否定するわけではない。そうではなく，歴史研究においては，経済法則あるいは経済理論が主役の座を降りて，個性的な事実を説明するための手段になると考えるのである。

いま述べたことを，さらに明白にするために，エッジワースによる『解釈』の書評を取上げよう。エッジワースによれば，科学に対するロジャーズの貢献は，4つの項目からなっている。すなわち，(1)過去の経済的事実を新たに発掘したこと，(2)歴史的事実の解釈，すなわち事実間の因果連関を追跡したこと，(3)経済法則を例証したこと，(4)経済学の論理的方法に関する指針を与えたこと，これである[18]。この分類は，おおむね適切であるといえる。われわれにとってとくに問題となるのは，(4)の項目である。当代を代表する経済理論家の一人であったエッジワースは，理論に対するロジャーズの姿勢を批判する。エッジワースによれば，ロジャーズは，リカードウをはじめとする経済理論家を激しく攻撃するけれども，実際には理論の役割を認めているというのである。

> ロジャーズ教授がとくに大胆に経済理論を利用するのは，現在を解釈し未来を予想するために理論を用いるときだけではない。過去を再構成するために理論を用いるときにも，そうするのである。かくして彼は，14世紀初頭の飢饉の後に賃金率が高かったということから，相当な人命の損失があったにちがいないと推論するのである。(Edgeworth 1888, p.396)

ロジャーズが「需要・供給の法則」に基づいて，賃金率の高騰という事実から労働供給の減少という事態を推論したのは確かであろう。先に述べたとおり，歴史学派のアプローチにおいても，個性的な事実を説明するさいに，その手段として一般法則が利用されることを否定するわけではない[19]。とくにロジャーズの経済史研究は，他の歴史学派の研究と比べて，物価や賃金の動向に関心を向ける度合いが強かったから，経済理論の応用にも適していたといってよい。したがって，方法論上の発言はともかく，実際の経済史研究においては経済理論を利用しているのであるから，その限りでは「ロジャーズ教授と，広く受容されている現代の経済学者との間には，真の不和は存在しない」(Edgeworth 1888, p.396)ということもできる。しかし，この場合でさえ経済理論の応用は，過去を再構成する試みの一部でしかないということに注意し

18) エッジワースは，(2)に関連して，ロジャーズが「イングランドの初期の人口を細切れの情報から推計する」という演繹的推理(deductive reasoning)を行っていると述べるのであるが，この場合は前提と結論との関係が必然的ではないので，厳密な意味では演繹とはいえないであろう。また(3)に関連して，経済理論に対するロジャーズの貢献は，法則の例証だけではないとし，法則の提起もあったとする。そして，「労働組合と株式会社との間の類推(analogy)は，独創的かつ重要である」と述べるのであるが，それ以上の説明はなく，法則と類推の関係は明らかではない。なお，エッジワース自身の方法論については上宮(2010)を参照されたい。

19) とはいえ，アシュレーによれば，歴史家にとっての経済理論の実際的効用に関する限り，使用される言語の大半が不必要に仰々しいと感じないわけにはいかないという。確かに歴史家も，需給の変化による価格の変化について語るけれども，「現象間の結合をそのように明白に追跡する力は，平凡な常識以上のものを必要とはしない。われわれは，ソロルド・ロジャーズの愉快な言葉遣いさえ用いて，『それくらいまでは，エジプトやバビロニアの諸王の時代にも知られていた』と言ってもよい」(Ashley 1893, pp.12-13)。

なければならない。賃金率の高騰という事実から労働供給の減少という事態を推論しただけでは，飢饉の後の事態を再構成することにはならない。それ以外にも，この事態を生み出した諸原因に関する多くの知識が必要になることはいうまでもない。要するに歴史学派のアプローチの特徴は，歴史的に個性的な事実に注目し，それを引き起こした多様な原因を明らかにするという点にある。それは，一般的な法則を明らかにする，あるいは法則を事実によって例証するという理論派のアプローチとは，関心の向きが違うのである。こうした関心の相違を相互に認め合う寛容の時代は，激しい論争の時期を経て，訪れることになるのである。

本項を締めくくるにあたって，「歴史の経済的解釈（economic interpretation of history）」という用語について，述べておかなければならない。ロジャーズのいう「歴史の経済的解釈」とは，歴史の経済的側面に関する解釈ということであり，その場合の解釈とは因果的説明のことであった。つまり，歴史上の経済的事実を取上げて，それを生じさせた経済的・非経済的な原因を探究すること，これが「歴史の経済的解釈」の意味であった。ロジャーズ自身の言葉を用いるならば，歴史の経済的解釈とは「社会的事実を吟味し説明すること」（Rogers 1888, ix）にほかならなかった。しかし，われわれが「歴史の経済的解釈」という言葉を聞くときに思い浮かべるのは，このような意味ではないであろう。つまり，歴史上の政治現象などを経済的な下部構造から解釈する，という方法を思い浮かべるほうが普通かもしれない。事実，シュンペーターは，この言葉をマルクスの歴史理論を表すものとして用いている。シュンペーターによれば，マルクス的な「歴史の経済的解釈」とは，(1)生産形態ないし生産条件は，社会構造の基本的決定要素であり，この社会構造はまた人間の心構えや行動やさらには文明を生み育てるものである，(2)生産形態そのものはそれ自身の論理をもっている，すなわち，生産形態は内的必然性によって変化し，自らの活動自体のなかにその後続形態を形成していく，という二つの命題で要約されるものである（Schumpeter 1952, p.12）。要するに，下部構造が上部構造を規定し，下部構造の変化に伴って上部構造も変化してゆく，という歴史解釈である。われわれが「歴史の経済的解釈」という言葉を聞くときに思い浮かべるのは，ロジャーズの意味よりも，通常はシュンペーターの意味であるように思われる。ロジャーズの用法は誤解を招きやすいものではあるが，この言葉が晩年の代表作の標題に掲げられたのである。

2. 貧困の説明

『解釈』を形成する諸章は，1887-1888 年にオックスフォード大学で行われた講義に基づくものであったが，ロジャーズはその講義のテーマについて次のように述べている。

> 漠然とではあるが，多くの人々は，目の前にある窮乏の大部分は，特定階級の利害にそって制定され維持されている法律の直接の産物であるという印象をもっている。全体として，彼らは正しい。社会を悩ませている問題の多くは，その歴史的起源をもっている。現在の原因もあるが，相対的に稀である。
>
> そこで私は，他のところで行ったように，社会的事実を吟味し説明することを，この一連の講義における私の仕事にしようと決心した。（Rogers 1888, ix）

1860 年代からの研究で，ロジャーズは，15 世紀から 16 世紀初頭と比べて，18 世紀後半から 19 世紀の労働者の生活水準は低下したという結論に達していた。ロジャーズが『解釈』で明らかにしようとしたのは，労働者の貧困という事実の歴史的原因であった。ロジャーズによれば，経済学者たちは労働者の貧困について，労働者自身に先見の明がないこと，すなわち彼らが愚かにもその数を増やしてしまうことがその

原因であると主張してきた。「経済学者たちが執筆した数多くの著作のなかのどれにも，この痛ましい光景の歴史的原因を辿ろうとする試みを，私は一度として見たことがない」（Rogers 1888, vii）。たしかに古典派の経済学者たちは，マルサスの人口論に依拠して，労働者自身がその人口を抑制して労働供給を減らし，それによって賃金上昇を勝ち取ることが，生活状態を改善するための最も重要な方策であると考えていた。これに対してロジャーズは，国王や貴族といった支配階級が採用してきた政策が，労働者の貧困を生み出した原因であると主張したのである。

この問題に関するロジャーズの記述は14世紀から始まる。イングランドでは，1348年から断続的に黒死病（ペスト）が流行し，そのために人口が激減した。この人口減少に伴って働き手の不足という事態が生じ，土地所有者に対する労働者側の交渉力が著しく強くなった。その結果，農奴の賦役の金納化，地代の低下，賃金の騰貴といった労働者に有利な状況が生まれることになる。ロジャーズによれば，黒死病は，

> 人口のほとんど3分の1を殺した。労働の賃金は即座に倍増し，大土地所有者の破滅が差し迫っているように思われた。資本家的農業の利潤は20パーセントからゼロに減った。ところで，大土地所有者は，彼が売らなければならないものの高価格を損害とはみなさなかったが，彼が買わなければならないものの高価格は耐え難い悪事であると考えた。そこで彼は，自分の富を保護したり回復したりするために，国政――すなわち，行政と議会――を利用した。（Rogers 1888, p.22）

このようにして，当時の国王であったエドワード3世23年（1349年）の立法を嚆矢とする一連の「労働者規制法（Statute of Labourers）」が制定されることになる。労働者規制法は，賃金を黒死病流行以前の水準まで引き下げるべきことを定めるなど，総じて旧秩序を回復しようとするものであった。しかし，ロジャーズによれば，これらの労働者規制法は成功しなかった。労働者の抵抗がその企図を挫いたというのである。1381年に起こった「ワット・タイラーの反乱」は，領主層が労働者を強制的に旧来の地位に引き戻そうと企てたことに対する抵抗であった。この反乱以降，農奴解放が次第に進み，それは領主層の私利私欲から生じた規制法に抵抗する労働者の力をさらに強化することになった。その結果，労働者規制法は失敗し，15世紀から16世紀初頭にかけて，イングランドは「まさに労働者の最良の時代（the very best age of the workman）」を迎えることになった（Rogers 1888, p.34）。そしてロジャーズは，「タイラーの反乱の物語は，すべての通常の歴史書で十分詳細に語られている。そして現代の歴史書は，私がその反乱の原因と帰結について20年以上前に出版した証拠を，暗黙のうちに受入れている」（Rogers 1888, p.30）として，自説の普及を誇るのである[20]。

労働者の最良の時代が暗転するのは，テューダー朝のヘンリー8世（在位1509～47年）以降の時代であるとされる。イギリス国教会を樹立した国王として知られるヘンリー8世は，経済史という観点から見ても，重要な役割を果たした人物であった。ロジャーズによれば，労働者の窮乏化をもたらしたのは，貨幣の悪鋳，それに続く物価騰貴，ギルド財産の没収，治安判事による賃金の決定という4つの原因であった。貨幣の悪鋳は，国王の強欲から生じたとされる。「イングランド史全体のなかで，ヘンリー〔8世〕ほど常軌を逸して，かつきまぐれに浪費した君主はいなかった」（Rogers 1888, p.35）。ヘンリー8世は，修道院の土地を没収・売却しただけではなく，さらに人民から財産を奪おうとし

20）歴史書ではなく散文詩であるが，ウィリアム・モリスの『ジョン・ボールの夢』（1888年）は，ワット・タイラーの反乱の背景に関して，ロジャーズの主張に依拠して書かれている（Ashley 1889, p.399）。

た。その最も効果的な方法が低品位貨幣の発行であったという。貨幣の悪鋳は，エドワード6世（在位1547～53年）の治世にも行われ，そのために激しい物価騰貴が起こった。ロジャーズによれば，「食料は2と4分の3倍に上昇した。すなわち，変化のあとの16シリング6ペンスは，以前の6シリングにすぎない。そして，賃金はほとんど変わらなかった」（Rogers 1888, p.240）というのである。これは労働者の実質賃金が大幅に低下したことを意味する。

人民の貧困を増大させた第3の原因は，エドワード6世の時代に行われたギルド財産の没収であった。ロジャーズによれば，ギルドは中世の共済組合であり，貧困者を保護するものでもあったという。「賞賛に値する見通しを備えた最良の労働者は，共済組合（benefit societies）あるいは労働組合事業（labour partnerships）のいずれかを通じて，自分自身の保険を実現しようとしている。中世においては，労働者は彼らの同業組合（guilds）を通じてそれを行った。同業組合はイングランドのいたるところで，自分たち自身の要求にしたがって慈善事業のために土地と家屋を購入した」（Rogers 1888, p.20）。しかし，9歳で即位したエドワード6世を補佐した廷臣たち，とくにサマセット公が，ギルド財産の横領行為を行ったというのである（Rogers 1888, p.240）。

人民を苦境に陥らせた第4の原因は，エリザベス（在位1558～1603年）の治世に行われた賃金への介入であった。「四季法廷の評価によって，労働者と職人（artizan）の賃金が固定され，治安判事が認めた額以上を受取った者や支払った者は厳しく罰せられた」（Rogers 1888, p.240）。ロジャーズによれば，この政策は，貧民の困窮を頂点まで高め，貧困状態を不可避にし，窮乏を普遍的なものにした。「私の判断では，エリザベスのこの法律は，イングランドの法令全書のなかで最もいまわしいものである。というのは，貧者のすべての権利を，生きる権利さえもなぎ倒したからであり，完全に地代の利益に沿うものだったからである」（Rogers 1888, p.241）。つまり，彼によれば治安判事による賃金への介入は，農業労働者を雇用する土地所有者の利益のために行われたというのである。

このように，『解釈』におけるロジャーズは，経済理論を例証するために事実に訴えるのではなく，まず注目すべき事実に目を向けて，それを引き起こした歴史的原因を探究しようとした。こうした姿勢は，われわれが「説明の個別性」と呼ぶ歴史学派の観点を示すものということができる。しかも，経済的事実を説明するさいに，政治がその原因になったことを指摘する点で，「社会現象の統一性」の観点も示唆されている。その意味で，この時期のロジャーズは古典派とは違う研究のスタイルを示しており，イギリス歴史学派の一員とされることにも十分な根拠があるということができるのである。

しかし，貧困状態の起源に関するロジャーズの説明は，かなり単純な図式で構成されているといわなければならない。すなわち，テューダー朝の国王とその廷臣たちの強欲が，貨幣の品位低下，物価騰貴，ギルド財産の没収，賃金の低下を引き起こし，それらが人民の貧困状態をもたらしたというのである。歴史学派の観点を示しつつも，単純な図式に還元するロジャーズの説明内容は，他の歴史学派の論者には受け入れがたいものであった。アシュレーは，「最初に事実を得て，そしてそれらを説明する」というアプローチに賛意を表しながら，ロジャーズの結論に対しては，批判を加えている。アシュレーによれば，たしかに，ヘンリー8世以降の時代に物価騰貴が起こったが，「それは新世界からの貴金属の流入によるものであり，この一原因は，イングランド王とその廷臣の強欲とは少しも関係がない」（Ashley 1889, p.401）。またロジャーズは，多数の農民が土地を失うことになった囲い込みの影響を副次的なものとみなしている。すなわち，「牧羊，地代引上げ，そして農場統合の企てが，災難を増大させた可能性はある。しかし，私が完全に確信しているの

は，上記の 4 原因がそれを十分に説明するということである」(Rogers 1888, p.243)[21]。さらに，産業革命による手工業者の失職や，婦人・児童労働の拡大に伴う弊害にも言及していない。こうしたことを考慮するならば，ロジャーズの『解釈』は，貧困状態を生み出した原因に関する歴史研究として，けっして十分なものではなかったといわなければならない[22]。とはいえ，ロジャーズによる歴史の経済的解釈は，その説明の内容についてみれば，歴史研究者からの賛同を得られるものではなかったかもしれないが，「説明の個別性」という歴史学派の観点を示していたことは確かなのである。

おわりに

学派の規定は簡単ではない。経済学史上のどの学派についても，その特徴と成員の詳細については，必ずしも合意が成立しているわけではない。われわれは，イギリス歴史学派の特徴として，「行為の多元性」「社会現象の統一性」「所与の事実の優先性」「歴史法則の可能性」「説明の個別性」「学説の相対性」という 6 つの観点を挙げたが，この学派に含まれるとされる論者たちが，これらの観点すべてを備えているわけではない。また，論者によって，それぞれの観点の内容も微妙に異なっている。決定的な解を求めることは難しいかもしれないが，学派という括りが経済学史の理解のために一定の有効性をもつことは疑いない。したがって，メンバーとされる者と一般的な特徴とをすりあわせながら，説得力のある学派規定をめざし，それによって経済学史の理解を深める努力をすることが重要であると思われる。

本稿で取上げたロジャーズは，初期の著作で精力的に歴史研究を推進し，「所与の事実の優先性」という歴史学派の特徴を示しながらも，既成の経済理論を例証するために歴史的事実を利用するという態度をとった。これは古典派の方法論と対立するものではなかったのである。しかし，歴史学派が台頭するころになると，まず特定の事実に注目し，それを説明することを歴史研究の課題とするようになった。その説明の内容は，他の歴史学派から批判されるものではあったが，アプローチの仕方は明らかに歴史学派のものであった。ロジャーズについては，彼が最初から最後まで一貫して歴史学派であったかどうかということよりも，19 世紀後半の経済学史の動的な展開のなかに位置づけるべきであろう。そのように考えるならば，ロジャーズは明らかに，歴史学派の展開の一翼を担っていたということができるのである。

21）引用文中の傍点は，原文がイタリックで強調されていることを表す。

22）もっとも，ロジャーズにしても，彼が列挙した 4 原因のみが貧困の原因であったと主張したわけではなく，最重要なものがそれら 4 つであったというのである。「イングランド救貧法の必要性は，明らかに支配者たちおよびその執行官たちの犯罪に遡ることができる。先に列挙した 4 原因がなかったならば困窮は生じなかったであろう，と言っているのではない。私が確信しているのは，困窮はもっと御しやすいものだったであろうということである」(Rogers 1888, p.244)。

参考文献

Ashley, W.J. 1889, James E. Thorold Rogers, in *Political Science Quarterly*, Vol.4, rpt. in R.E.Backhouse & P.J.Cain eds., *The English Historical School of Economics, Vol.1: Selected Articles*, Bristol: Thoemmes Press, 2001.

Ashley, W.J. 1893, On the Study of Economic History (An Introductory Lecture Delivered before Harvard University, 4th January 1893), in W.J. Ashley, *Surveys, Historic and Economic* (1900), New York: A. M. Kelly, 1966.

Ashley, W.J. 1896, Historical School of Economists, in R.H.I. Palgrave ed., *Dictionary of Political Economy*, Vol.2., London: Macmillan, 1896.

Ashley, W.J. 1899, ROGERS, James Edwin Thorold (1823-1890), in R.H.I. Palgrave ed., *Dictionary of*

Political Economy, Vol.3., London: Macmillan, 1899.

Bacon, F. 1620, The New Organon, in *The Works of Francis Bacon*, Vol.4, collected and edited by J. Spedding, R.L. Ellis and D.D. Heath, Stuttgart: Friedrich Frommann Verlag, 1986, 服部英次郎訳「ノヴム・オルガヌム」（同訳『ベーコン』世界の大思想第6巻，河出書房，1966年，所収）.

Cunningham,W. 1894, Why had Roscher so Little Influence in England?, in *Annals of the American Academy of Political and Social Science*, vol.5, November 1894; rpt. in *The Methodology of Economics: Nineteenth-Century British Contribution, Vol.7: Alfred Marshall and William Cunningham*, London: Routledge/Thoemmes Press, 1997.

de Marchi, N.B. 1976, On the Early Dangers of Being too Political an Economist: Thorold Rogers and the 1868 Election to the Drummond Professorship, in *Oxford Economic Papers*, New Series, Vol.28.

Edgeworth, F.Y. 1888, Book review: *The Economic Interpretation of History*. Lectures delivered in Worcester College Hall, Oxford, by James E. Thorold Rogers. (Fisher Unwin.), in *The Academy*, Dec. 22, 1888.

Hewins, W.A.S. 1892, Review: The Industrial and Commercial History of England, by J.E.T. Rogers, *Economic Journal*, Vol.2.

Hewins, W.A.S. 1897, James Edwin Thorold Rogers, in *Dictionary of National Biography*, Vol.17, Oxford University Press.

Kadish, A. & Tribe, K. eds. 1993, *The Market for Political Economy: The Advent of Economics in British University Culture, 1850-1905*, London: Routledge.

岸田理 1955,「ソロルド・ロジャーズについての一研究」（京都大学『経済論叢』第76巻第6号,1955年）.

Koot, G.M. 1987, *English historical economics, 1870-1926*, Cambridge University Press.

熊谷次郎 1991,『マンチェスター派経済思想史研究』日本経済評論社.

Leslie, T.E.C. 1879, The Known and the Unknown in the Economic World, in *Fortnightly Review*, vol.25ns.

Maloney, J. 1993, The Teaching of Political Economy in the University of London, in Kadish & Tribe eds., 1993.

Morris, W. 1888, *A Dream of John Ball and A King's Lesson*, London: Reeves & Turner, 横山千晶訳『ジョン・ボールの夢』晶文堂，2000年.

Political Economy Club 1876, *Revised Report of the Proceedings at the Dinner of 31st May, 1876, Held in Celebration of the Hundredth Year of the Publication of the "Wealth of Nations"* (London: Longmans, Green, Reader & Dyer, 1876), Tokyo: Nihon Keizai Hyoron Sya, 1980.

Rogers, J.E.T. 1866, *A History of Agriculture and Prices in England*, Vols.I-II, Oxford: Clarendon Press.

Rogers, J.E.T. 1868, *A Manual of Political Economy for Schools and Colleges*, Oxford: Clarendon Press.

Rogers, J.E.T. 1879, Book review: *Essays in Political and Moral Philosophy*. By Thomas E. Cliffe Leslie. (Dublin University Press.), in *The Academy*, June 7, 1879.

Rogers, J.E.T. 1888, *The Economic Interpretation of History*, London: T. Fisher Unwin Ltd.

Rogers, J.E.T. 1884, *Six Centuries of Work and Wages*, London: Swan Sonnenschein.

Rogers, J.E.T. 1892, *The Industrial and Commercial History of England*, ed. by A.G.L. Rogers, New York: Putnam.

佐々木憲介 2001,『経済学方法論の形成――理論と現実との相剋 1776-1875――』北海道大学図書刊行会.

佐々木憲介 2004,「リチャード・ジョーンズと歴史学派」,研究年報『経済学』（東北大学）第65巻第3号.

Schumpeter, J.A. 1952, *Capitalism, Socialism, and Democracy*, 4th edition, London: George Allen &

Unwin, 中山伊知郎・東畑精一訳『資本主義・社会主義・民主主義』東洋経済新報社，1995 年.

Schumpeter, J.A. 1954, *History of Economic Analysis*, New York: Oxford University Press, 東畑精一・福岡正夫訳『経済分析の歴史』全 3 冊，岩波書店，2005-2006 年.

上宮智之 2010,「エッジワースと経済学方法論争」（只腰親和・佐々木憲介編著，『イギリス経済学における方法論の展開――演繹法と帰納法――』昭和堂，2010 年，所収）.

Wood, J.C. 1983, *British Economists and the Empire*, Beckenham, Kent: Croom Helm.